

反省している〈私〉は反省によって捉えられるのか

——フッサールにおける自我論の再検討——

佐藤大介（岡山大学）

はじめに

反省している〈私〉は反省によって捉えられるのだろうか。この問いは、〈私〉・自我をフッサール現象学の枠組みの中で探究するならば、方法論上、避けては通れない。というのも、フッサールは、反省を基本的な方法に据えて、〈私〉を分析するからである。もし、反省している〈私〉が反省によって捉えられないとすれば、その分析は、〈私〉について未解明な面を残すことになってしまう。

いくつかの先行研究は、まさに反省している〈私〉を反省によって捉えようとする際、その方法上の限界が露呈されると、主張している。さしあたり簡潔に言うと、それらの先行研究によれば、反省によって主題的に捉えられている〈私〉は、すでに過ぎ去った〈私〉であり、そこでまさに働いている〈私〉、つまりまさに反省している〈私〉は、当の反省において常に取り逃がされてしまう（cf. Held [1966, 94]、Zahavi [1999, 189–190]、斎藤 [2000, 85–86]）。先行研究はこのことを、いわゆる「C草稿」を中心とした、フッサールの晩年の草稿から引き出している。なお、本論では、以上のような先行研究を、簡潔に〈先行研究〉と呼ぶ。

本論の目的は、先行研究の上述の見解は妥当ではなく、フッサールの議論に基づけば、まさに反省している〈私〉は反省によって捉えられうると、示すことである。より具体的に言えば、まさに反省している〈私〉の存在が気づかれ、そしてそれが主題化されること、これらが現象学的に妥当な仕方であり立つ場面を示す。そのために本論では、「C草稿」で呈示された見解を、いくつかの公刊著作での議論と結びつけて解釈する。こうした解釈の手続きは、断片的な晩年の草稿を恣意的に解釈することを防ぐために、必要不可欠である。ところが、先行研究は、公刊著作で呈示された要点のいくつかを見逃したまま、「C草稿」の議論を解釈しているように思われる。

本論では、次の手順で考察を進める。まず、まさに反省している〈私〉に対する反省の有効性について、何が現象学的に検討されるべきなのかを、明確にする（第1節）。そのうえで、まさに反省している〈私〉の存在への〈気づき〉が成り立つことを、『イデーⅠ』での「ノエシス的な反省（noematische Reflexion）」に関する議論に照らして明らかにする（第2節）。そして、そうした〈私〉の存在が現象学的に妥当なかたちで主題化されている場面を、フッサールの「変様（Modifikation）」概念に関して田口が呈示した議論に、『内的時間意識の現象学』での〈今〉に関する議論を組み合わせることで、明示する（第3節）。

第1節 問いの先鋭化

フッサールにおいて〈私〉・自我とは、「私は知覚する」「私は考える」というように、何らかの具体的な意識の働きと不可分なものである (cf. III/1, 178–180; IV, 97, 111)。意識が常に「或るものについて」働くという「志向性」を具えていることを踏まえれば (cf. III/1, 73–75, 187–189)、意識の眼差しが向かう「或るもの」が「客観」・対象であるのに対して、その眼差しの発端が「主観」・〈私〉である (cf. III/1, 75; IV, 97, 105)。

したがって、〈私〉は、具体的な意識の働きが反省によって主題化されることで、それとともに主題的に見出される。ただし、フッサールによれば、〈私〉は、意識体験の「実的な契機」、つまり具体的な意識体験の一部として、見出されるわけではない (cf. III/1, 123; IV, 103)。具体的な意識体験は、単純のものではなく、「音楽を聴きつつコップを見ながら、もう一杯コーヒーを飲むかどうか考える」というように、様々な種別の意識体験が同時に生じ、さらに刻々と変化してゆく。〈私〉は、そうした体験流を統一する機能的契機として、そのつどの具体的な意識体験から抽象的に析出される (cf. IV, 99)。たしかに、そのように見出される〈私〉は、それ自体では内容をもたない「空虚な」もの、「自我極」として際立てられうる (cf. III/1, 179–180; IV, 97, 105)。とはいえ、〈私〉はいつも具体的な内容を伴っていること、これが忘れられてはならない。つまり、「体験をしている自我は、それ自身だけで理解されうるものや、一つの固有な研究対象にされうるものではない」 (III/1, 179) のである。

上述を踏まえれば、反省している〈私〉を現象学的な分析の題目として取り上げるためには、その〈私〉を、そのままに反省している意識の働きとともに、反省によって主題化せねばならない。つまり、反省を主題化する、反省の反省が必要である。

ところが、先行研究は、まさに反省している意識および〈私〉を反省によって主題的に捉えることはできないと、主張する (cf. Held [1966, 6–7, 94–95, 119–120], Zahavi [1999, 56, 189–194], 斎藤 [2000, 85–86])。例えば、ザハヴィは次のように論じる。私が対象に向かって没頭しているとき、私は私自身を主題的に意識してはいない。それゆえ、〈私〉を主題化するためには、反省が必要である。しかし、その反省においては、そこでまさに反省している〈私〉が、主題的に意識されていない。つまり、その際には、知覚や記述が知覚されるものや記述されるものに属さないように、主題化の過程そのものは、それ自体主題化される内容に属していないため、まさに反省している〈私〉が見出されない。たとえ、その反省している〈私〉を主題化するために、新たに反省の反省をしてみても、先ほどと同様に、この反省の反省をまさにしている〈私〉が、そこで主題的に意識されていない。まさに反省している〈私〉は、機能する主観性である以上、当の反省において、非主題的地点としてつねに残り続ける。このようなザハヴィの議論は、他の先行研究でも同様に共有されている。

先行研究によれば、反省において主題的に捉えられている〈私〉は、そこでまさに反省している〈私〉ではなく、すでに過ぎ去った〈私〉である (cf. Held [1966, 80–81, 96, 119–120]、斎藤 [2000, 85–86]、Zahavi [1999, 190])。例えば、ヘルトは次のように論じている。〈私〉への反省が成り立つためには、反省する〈私〉と反省される〈私〉との間に、隔たりないし分離 (Spaltung) がなければならない。この隔たりの幅が、〈私〉に、いわば〈私〉自身へと反省によって明示的に振り返るための活動空間をもたらす。こうした隔たりは、時間的経過によって生じる。つまり、〈私〉は、絶えず流れ続けてゆくとともに、自己自身からの原初的な隔たりを生み出すからこそ、いつでも自己自身へと遡ることができる。それゆえ、反省は、フッサールが『第一哲学』の中で呼ぶように「後から覚認すること (Nachgewahren)」(VIII, 89) であり、反省によって捉えられているものは、すでに過ぎ去ったものにほかならない。このようなヘルトの議論と同様に、他の先行研究も、反省の後からという性格を強調して受けとめている¹。

さらに先行研究は、上述を踏まえて、反省において主題化された〈私〉と主題化される以前の〈私〉との同一性について、疑問を投げかけている (cf. Held [1966, 104]、Zahavi [1999, 149–150]、斎藤 [2000, 85–88])。例えば、斎藤は次のように論じる。反省はつねに、その反省の究極的な現在を後から覚認しうるにすぎない以上、反省において主題化された〈私〉と主題化される以前の〈私〉の間には時間的隔りがある。それにもかかわらず、両者が同じ〈私〉であることは、どこで保障されるのか。もちろん、この同一性は、疑いえない事実として、さしあたり認められざるをえない。というのも、そうでなければ、そもそも反省が反省として成り立たなくなってしまうことは、明らかだからである。したがって、ここで必要なのは、その同一性の根拠を理解することである。この理解を欠いたままでは、現象学において反省は、まさに反省している〈私〉を分析する方法として、十分に妥当性を基礎づけられていないことになる。なお、本論では、このように斎藤が問いかける〈私〉の同一性を、簡潔に〈反省における自我の同一性〉と呼ぶ。

さて、先行研究の以上の議論には、次の二点に検討の余地がある。

(A) まさに働いている〈私〉の存在

先行研究は、まさに働いている〈私〉が非主題的に存在していることを認めている (cf. Held [1966, 146]、Zahavi [1999, 189]、斎藤 [2000, 58–59, 87–88])。たしかに、先行研究は、〈まさに働いている《私》は反省において主題化されたものの中にはない〉と主張している。しかし、この主張は、その〈私〉の存在そのものを否定するものではない。

では、まさに働いている〈私〉の存在はどのようにして認められるのだろうか。「C 草稿」でフッサールは、〈私〉がまさに働いている場面を「根源現象」として流れゆく現在と見做したうえで (cf. Mat VIII, 6)、次のように述べている。

¹ これについては、佐藤 [2018]を参照。

生き生きと流れゆく現在としての原現象的な存在は、原本的に (*originaliter*) 意識されており、その現在が形づくるとしてのものに向かう、原本的な気づき、知覚の領野である。(Mat VIII, 7)

この一節にあるように、フッサールによれば、まさに働いている〈私〉の存在は、原本的な気づき、知覚という仕方、意識されている。では、こうした意識は、どのようなものなのか。これについてフッサールは、同草稿の中で詳しく論じていない。しかし、だからといって、フッサールが分析の限界に直面していると思えるのは、性急であろう。フッサールは、それに答えるだけの議論をどこかに用意していたのではないだろうか。先行研究は、この点について十分に検討していないように思われる。

(B) 反省が必要とする時間的隔たり

先行研究と対比的に、フッサールは、反省が時間的隔たりを必要としても、自我の同一性が成り立つと見定めている。フッサールは「C草稿」の中で、次のように述べている。

原本性 (Uroriginalität) における意識流は、原本的な自我極なしに考えることはできない。その自我極は、匿名的な意識体験の中にある。反省作用は、たった今という状態で、反省されていない体験やこれの自我極を明らかにする。しかし、両者は同一のものとして合致する。(XV, 350)

このように、フッサールによれば、まさに働いている匿名的な〈私〉と、反省によって主題化された〈私〉とは、両者の間に〈たった今〉という時間的隔たりがあろうとも、同一的である。つまり、まさに反省している〈私〉に対する反省の有効性は、反省が必要とする時間的隔たりによって失われるわけではないと、見定められている。

では、そのような時間的隔たりとは、どのようなものなのだろうか。フッサールはこれについて、上の引用箇所後に論じてはいない。そこで本論では、彼がそれをどのように理解していたのかについて、彼の他の著作における議論を手がかりにして検討する。先行研究は、こうした検討を十分に行ってはいない。

以上の (A) (B) を順に、それぞれ本論第二節と第三節で検討する。

この検討において重要な点は、まさに働いている〈私〉の存在、および、〈反省における自我の同一性〉が、明証的に捉えられうるかどうかにある。フッサールにおいて明証とは、「真理の『体験』」や「直接的に『見る』こと」と表現されるように、或るものごとに関する判断を下すための権利根拠が、そのものごとについての意識体験において得られることを意味する (cf. XVIII, 193; III/1, 43; II, 35)。どんなものごととも、体験において与えられていることとの連関を失っては、その真理性を確かめることはできない。明証を真理の根源的審級として「原理中の原理」に据えることが、フッサールの下した哲学的決断であるとともに、根本主張である (cf. I, 54; III/1, 51, 326)。つまり、明証的なものごとでなければ、現象学的

には認められないのである。

フッサールは明証に様々な種別を設けているが (cf. I, 55–56; III/1, 317–321, 326–328)、本論で取り上げられるべき明証は、「必当的明証 (apodiktische Evidenz)」である。これは、ものごとが意識との相関関係において、〈現実に存在しないはずはない〉もの、〈別様には考えられない〉ものとして、疑いの余地なく現れ出ていることを意味する (cf. I, 55–56)。こうした明証性は、反省において今まさに捉えられているものに具わっている (cf. I, 62)。例えば、〈コップを知覚している〉ということが反省されている際、その〈コップを知覚している〉体験自体は〈現実に存在しないはずはない〉もの、〈別様には考えられない〉ものとして現れ出ている。なお、本論では以下、特に断らないかぎり、こうした必当的明証を簡潔に明証と呼ぶ。

第2節 まさに働いている〈私〉の存在

本節では、前節で挙げられた一つ目の論題、(A) まさに働いている〈私〉の存在を取り上げ、それが明証的に気づかれうることを、明らかにしたい。

そのための重要な足掛かりとなるのは、フッサールが『イデーオン I』で呈示した、「ノエシス的な反省」に関する議論である。そこで本節では、まず、「ノエシス」という概念を明確にし、そのうえで、「ノエシス的な反省」を踏み込んで解釈する。そして、上の〈気づき〉が成り立っている場面を詳しく論じる。

「ノエシス」とは、意識に志向性を導入するものである (cf. III/1, 194, 202)。これをフッサールは、具体的な意識体験について説明するために、「ノエマ」、「ヒュレー」と併せて持ち込んでいる (cf. III/1, 192–194, 202–203)。フッサールによれば、如何なる対象も、意識との志向的相関において、〈何〉で〈どのよう〉であるというように、何かしらの「意味 (Sinn)」として現れ出る。このことをフッサールは、「構成 (Konstitution)」と呼ぶ (cf. III/1, 196, 228, 313)。「ノエマ」とは、言語化されているか否かにかかわらず、構成における対象的「意味」のことであり (cf. III/1, 202–203)、「ヒュレー」とは、構成における表象を形成する様々な感覚的なもののことである (cf. III/1, 192–193)。ヒュレーを「素材」として、これに「意味を与える働き (Sinngebung)」が「ノエシス」であり (III/1, 192, 194)、これによって意識体験は、ノエマについての意識として、志向性を具えるのである。

フッサールによれば、ノエシスの働きと対応する様々な「性格」が、ノエマの意味に付着している (cf. III/1, 210)。例えば、同じ〈コップ〉であっても、それは「想起的に (erinnerungsmäßig)」意識されていたり、「疑わしく (zweifelhaft)」意識されていたりしており、これに応じて、「想起されている」や「疑わしい」という性格が、〈コップ〉というノエマの意味に付着している (cf. III/1, 233, 239–240)。ただし、こうした性格は、あくまでノエマの意味に付着しているものである。つまり、それは、「意識されているところの対

象的なものに属しているのではなく、その対象的なものがどのように意識されているのかという、その仕方に属している」(cf. III/1, 300)。

上述のことを踏まえて、次に「ノエシスの反省」について解釈していこう。

「ノエシス的な反省」とは、今まさに働いている志向性に気づくことである。フッサールは、次のように述べている。

われわれが顕在的に体験しているもの(もしくは、われわれが想像変様において無反省的に意識しているもの)を、われわれは見えていない。したがって態度の変更、つまり、種々の、ヒュレー的、ノエシス的、ノエマ的な「反省」が必要なのである。(III/1, 349)

この態度の変更とは、意識の眼差しを、ただひたすらに対象を表象するものから、その表象を「表象されているかぎりでのそのもの」として捉えるものへと変えることである(cf. III/1, 207)。こうした態度をとるとき、そこでの対象は、例えば、〈知覚されているかぎりでのそのもの〉や〈想起されているかぎりでのそのもの〉というように、それを捉えている意識作用との志向的な相関関係とともに、明証的に現れ出ている。この際、〈知覚されている〉や〈想起されている〉といった性格が、現れ出ている対象に付着していることに着目すれば、ノエシス的な反省が成り立つ²。そうした性格の付着は、その性格がどんなものでも、対象が「意識されているもの」であることを表す(cf. III/1, 216–217)。言い換えればそれは、意識の志向性がそこで今まさに生き生きと働いていることを指し示している。それゆえ、性格の付着に着目すれば、今まさに働いている志向性に気づくことができるのである。こうした〈気づき〉が、原理的にはいつでも成り立ちうる。

ノエシス的な反省において意識の志向性が明証的に気づかれているならば、そこで今まさに働いている〈私〉の存在も、明証的に気づかれていると見做すことができる。というのも、志向性とは本来、対象と〈私〉との不可分な関係性が、具体的な一つの体験として生き生きと働いていることにほかならず、その志向的对象だけでなく、その志向性の発端、その志向的意識の主体・〈私〉の存在をも、含意してもいるからである。このような〈気づき〉こそ、第一節で引用した「C草稿」での論述に照らせば、その存在が「原本的に意識されている」こと、その存在への「原本的な気づき」に相当する。

上述のことは、反省している〈私〉の存在にも適用できる。これをフッサールは、「C草

² 「ノエマ的な反省」については、佐藤 [2019, 229–230]を参照。「ヒュレー的な反省」について言えば、これは、何ものかが与えられているという受動性に気づくこととして、解釈できるだろう。これについては、稿を改めて論じたい。なお、「ノエマ的な反省」と「ヒュレー的な反省」は、本論の議論に直接関係するものではないため、本論で深く立ち入る必要はない。

稿」の中で認めている。彼によれば、「私は…相応しい反省 (passende Reflexion) を通してのみ、主題的自我の背後に機能する自我が潜んでいることを『知る』」(Mat VIII, 190)。この一節は、「触発される自我と能動的な自我」について論じる中で呈示されており (cf. Mat VIII, 183)³、「相応しい反省」については十分に論じられていない。しかし、本節での議論を踏まえれば、それは、ノエシ的な反省に基づいた〈気づき〉であると解釈できる。

ただし、以上のようにして気づかれる〈私〉は、匿名性を孕んでいる。つまり、その〈私〉は、その存在に気づかれているだけで、どのようなものとしてかはもちろんのこと、未だ〈私〉としてさえ明示的に構成されてはいない。それゆえ、フッサールはそうした匿名的な〈私〉を、「原 - 自我」と呼ぶ (cf. Mat VIII, 2; 田口 [2010, 124, 217])。原 - 自我が〈私〉として明示的に構成されるのは、それが〈何〉で〈どのよう〉なのかが主題的に反省されるときである。このときはじめて、〈私〉が現象学的な分析の題目となる。本論では以下、そのような反省を〈主題的反省〉と呼ぶ。では、主題的反省は、現象学的方法として妥当なものなのだろうか。前節で確認したように、ここでとりわけ重要な点は、主題的反省において、〈反省における自我の同一性〉が成り立ちうるかどうかである。この点が、次節での争点となる。

第3節 反省における自我の同一性

本節では、第一章で示された二つ目の論題、(B) 反省が必要とする時間的隔たりを取り上げ、その隔たりにもかかわらず〈反省における自我の同一性〉が明証的に成り立ちうることを、明示したい。

そのための重要な足掛かりとなるのは、フッサールの「変様」概念に関して田口が呈示した議論と、『内的時間意識の現象学』での〈今〉に関する議論である。本節以下では、これらの議論を再構成して組み合わせる。そして、ノエシ的な反省において気づかれた非主題的・匿名的な〈私〉の存在が、明証的に主題化される場面を示す。

田口によると、フッサールにおける「変様」とは一般に、意識が何かしら変化したことを指し、この変様態は、自身の意味において、その原様態を遡示する (cf. 田口 [2010, 186–188, 212–213])。この変様現象の一つが、現在の意識が過去の意識へと流れゆく現象である。過去は、変様された現在であるという意味をもち、この意味がその原様態現在を遡行的に指し示している。このように変様は、意味変様として理解されるべきであって、心理学的・実在的な発生のように理解されてはならない。

田口は変様の基本構造を、「唯一性」と「等置」という二つの概念を用いて、より精確に描き出す (cf. 田口 [2010, 188–192, 216–219])。原様態は、変様態に対して「唯一性」を具えるとされる。これは、原様態が、それらの変様態に対して、その意味源泉として、逆転不可

³ この議論については、榊原 [2009, 399–401]を参照。

能な関係をもち、その逆転不可能性において比類ない特殊位置を占めることを指す。つまり、原様態は諸変様態と同格に並んでいるわけではない。例えば、時間の流れを生き生きと感じ取っているまさに今は、根源的に流れる現在であって、これの変様態である過去や未来と同列に並ぶものではない。ただし、原様態が変様態へと移行すると、この変様態は、他の様々な変様態との関係性の中に並置的に意味づけられる。この際、そうした並置だけでなく、原様態の「等置」も帰結する。これは、原様態が、変様態に対する非-変様態として、唯一性を保持しつつも、諸変様態との意味連関の中に置かれることを指す。つまり、等置された原様態は、いわば変様を識らない（変様なしにも意味的に存立しうる）原様態ではもはやないのである。例えば、過去 - 現在 - 未来というように、諸々の他の時間様態のうちの一つの時間様態である現在は、もはや変様を識らない現在ではない。

田口によれば、以上のような変様が、〈私〉に関して適用できる（cf. 田口 [2010, 212–219, 227, 270]）。原様態としての〈私〉とは、今まさに生き生きと働いている具体的な〈私〉、原 - 自我である。これに対して、変様態としての〈私〉とは、そのように生き生きと働いてはいない〈私〉であり、多数の他の〈私〉と並置的に捉えられた一人の〈私〉である。〈私〉は、変様態として現れ出るだけで、原様態としては現れ出ない。原様態としての〈私〉は、自己変様を蒙ることでいわば隠蔽される。しかし、原様態としての〈私〉は、ほかならぬこの隠蔽においてこそ、自己自身を告知している。すなわち、変様態として構成された〈私〉の具える意味、〈今まさに生き生きと働いている私ではない〉という意味において、原様態としての〈私〉が遡示されているのである。

さて、田口の上述の議論を踏まえれば、主題的反省において明示的に構成される〈私〉は、変様態として、その原様態を遡示している。まさに働いている〈私〉を反省によって主題化するためには、それへと新たな関心が向けられねばならない。つまり、主題的反省は、フッサールも認めるように、時間的経過を必要とする（cf. X, 119; XV, 350）。したがって、主題的に反省される〈私〉は、変様態として構成される。すなわち、それは、〈まさに今〉からの隔たりを具えたもの、もはや生き生きと働いてはいないものとして、構成される。この〈もはや生き生きと働いている私ではない〉という意味が、その変様態としての〈私〉が原様態であったことを遡示している。言い換えれば、その意味において、〈反省における自我の同一性〉が示されているのである。

では、上の遡示において、〈反省における自我の同一性〉は明証的に成り立っているのだろうか。すなわち、変様態としての〈私〉は、時間的隔たりをいわば乗り越えて、原様態としての〈私〉と明証的に結びつくのか、それとも、それらの〈私〉の間には、乗り越えられない時間的隔たり・断絶があるのか。これが、〈反省における自我の同一性〉を理解するうえで、核心的な問いである。これに本節の残りで答える。

ここで着目すべき点は、主題的反省において働く、〈今〉についての意識である。これに

については、『内的時間意識の現象学』での議論に照らして、より詳しく理解できる。

フッサールによれば、具体的に経験されている〈今〉は、点のような瞬間ではなく、時間的な幅を具えている (cf. X, 40, 85–86)。点のような瞬間的な今は、具体的な今から抽象される極限概念にすぎない (cf. X, 40)。具体的な〈今〉は、〈たった今〉、〈まさに今〉、〈今すぐ〉といった「位相 (Phase)」から成る、「切れ目なき統一」である (cf. X, 27–28, 85–86)⁴。それらの位相が同じ〈今〉において意識されているので、そのつどの〈今〉において、流れ去る事象、例えばメロディーが構成される。つまり、同じ〈今〉において、一つ一つの音が、〈たった今〉・〈まさに今〉・〈今すぐ〉という原初的な時間的差異を具えて意識されるからこそ、それらの音がメロディーとして成り立つ。ただし、それらの位相はそれぞれ、具体的な〈今〉から析出される抽象的な契機であり (cf. X, 27, 40)、具体的な経験の水準において直接見出されるものではない。

フッサールは、こうした〈幅のある今〉において働く意識の機能形式を示すために、〈把持 - 原印象 - 予持〉という概念を導入する (cf. X, 29–40)。〈幅のある今〉の中でも、〈たった今〉という時間的位相についての意識が「把持 (Retention)」であり、〈今すぐ〉という時間的位相についての意識が「予持 (Protention)」であり、把持および予持における位相の間として際立たせられる、〈まさに今〉という時間的位相についての意識が「原印象 (Urimpression)」である。把持・原印象・予持は、それぞれが想起・知覚・予期のようにそれ自体で成り立つ具体的な意識作用ではなく、同じ今において働く意識の構造契機である。つまり、それらは、具体的な〈今〉の意識体験の事実に基づいて、そこから役割に応じて析出されたものである。例えば、A音B音C音から成るメロディーについての知覚に照らすと、A音を〈たった今過ぎ去ったもの〉として〈今もなお〉捉えている意識が把持、B音を〈まさに今あるもの〉として捉えている意識が原印象、C音を〈今すぐ到来するであろうもの〉として〈今から〉捉えている意識が予持である。

こうした機能形式を用いてフッサールは、或る〈今〉において捉えられたものが、新しい〈今〉においてもなお、〈今〉のものとして捉えられようと論じる (cf. X, 27–31)。或る〈今〉の各位相において捉えられたものは、時間の流れとともに、それぞれ順に後の位相へと移り変ってゆく。すなわち、予持されていたものは原印象へ、原印象となっていたものは把持されたものへと移り変り、把持されていたものも、さらに把持されたものへと移り変わる。このようにして、把持の連続が生じる。この連続性が維持された中で捉えられているものは、〈今〉の幅に収まっているものである。つまり、或る〈今〉において捉えられたものが、新しい〈今〉において把持されつづけていけば、それはなおも〈今〉のものとして捉えられている。こうして、例えば、そのつどの今を貫いて連続する一つのメロディーが、構成されて

⁴ 〈今〉が幅を具えることは、〈今〉という語の日常的な使われ方にも表れている。例えば、「今食べた」や「今行く」というように、すでに行われたことや未だ行われていないことでも、それらは〈今〉として表現される。

いく (cf. X, 38)。

さて、〈今〉に関する以上の議論を踏まえれば、変様態としての〈私〉が、原様態としての〈私〉との同一性を明証的に遡示するものとして構成されている場合を、挙げるができる。

それは、まさに働いている〈私〉の存在が気づかれたうえで、それが同じ〈今〉において連続的に、主題的反省によって捉えられている場合である。まさに働いている〈私〉の存在が気づかれているならば、次に主題化すべきものが予め掴まれており、連続的に意識の眼差しを向け替えて、それを反省的に主題化できる。この場合、〈私〉の存在に気づくことと、これを主題化すること、これらが切れ目ない統一として、一つの具体的な〈今〉の意識体験を成している。つまり、その主題的反省では、同じ〈今〉において、匿名的な〈私〉が把持されつつ、それを主題化したものである〈私〉が原印象となっている。したがって、〈今〉における具体的な体験全体が明証的であることを踏まえれば、上の主題的反省においては、まさに働いている〈私〉が、〈今〉における生き生きした体験として、明証的に主題化されている。言い換えれば、そこで構成されている変様態としての〈私〉は、原様態としての〈私〉との同一性を、同じ〈今〉の意識体験として明証的に保持している。たしかに、匿名的な〈私〉を反省によって主題化するためには時間的経過が必要であり、この時間的経過が匿名的な〈私〉と主題化された〈私〉との間に時間的隔たりをもたらす。とはいえ、その隔たりは、同じ〈今〉における幅に収まりうるのであって、両者を必ずしも切り離すのではない。先行研究は、こうした場面を見落としている。

匿名的な〈私〉と主題化された〈私〉との区別は、上述の反省が成り立ち、この反省をさらに後から思想的に分析するによって、はじめて明示される。匿名的な〈私〉と主題化された〈私〉とは、それぞれ順に、主題的反省における〈たった今〉の位相と〈まさに今〉の位相とに対応させて、区別できる。つまり、主題的反省が必要とする時間的隔たりが、その区別を可能にする。しかし、〈たった今〉や〈まさに今〉といった位相は、先に指摘したように具体的な経験の水準で現れない抽象的概念である以上、これらに対応した〈私〉の区別も、主題的反省が生き生きと働いている具体的な経験においては現れないのである。

おわりに

以上の議論を踏まえれば、反省は、まさに反省している〈私〉を分析する方法として、現象学的に有効である。その〈私〉の存在は、ノエシス的な反省において明証的に気づかれうる。そして、ここから連続的に同じ〈今〉において、その〈私〉が、主題的反省によって捉えられうる⁵。たしかに、こうした主題的反省においても、その主題的反省をまさに行って

⁵ こうした本論の主張は、ザハヴィによる自我論の分類に照らせば、「先反省的自己意識」を否定することなく「自己表象主義」の立場を擁護するものとして、位置づけること

いる〈私〉が、非主題的なもの・匿名的なものとして居合わせている。とはいえ、その〈私〉の存在もまた上と同様な仕方で、新たに気づかれ、そして主題化されうるのである。

こうした本論の主張は、反省についてこれまで見過ごされがちであった面を浮き彫りにするものである。これまでのフッサール研究では、主題的反省の具える後からという性格があまりに強調して受け止められてきたため、本論で示した反省の有効性が見逃されている。このことは、フッサール研究の枠内に限らず、多くの論者にも共通しているといえよう。したがって、本論の議論は、反省に関するこれまでの多くの議論を再検討しようとするならば、その足掛かりの一つとなるだろう。

最後に、本論が残した主な課題を簡単に確認したい。

それは、他者の問題である。〈私〉が明示的に構成される際、そこには他者の存在が織り込まれている (cf. 田口 [2010, 199–202])。つまり、〈私〉という意味には、あなたでも彼らでもないという意味が、含まれている。こうした構成は、どのような意識の働きにおいて成り立っているのだろうか。これについては、稿を改めて論じたい。

文献

Held, Klaus [1966]: *Lebendige Gegenwart. Die Frage nach der Seinsweise des transzendentalen Ich bei Edmund Husserl, entwickelt am Leitfaden der Zeitproblematik*, Nijhoff.

Husserl, Edmund: *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Nijhoff/Kluwer/Spinger, 1950ff. (巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で指示する。)

———: *Husserliana Materiarien*, Kluwer/Spinger, 2001ff. (「Mat」と略記し、巻数をローマ数字で指示する。)

Zahavi, Dan [1999]: *Self-Awareness and Alterity. A Phenomenological Investigation*, Northwestern University Press.

——— [2014]: *Self and Other. Exploring Subjectivity, Empathy, and Shame*, Oxford University Press.

斎藤慶典 [2000]: 『思考の臨界——超越論的現象学の徹底』、勁草書房。

榊原哲也 [2009]: 『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、東京大学出版会。

佐藤大介 [2018]: 「生き生きした現在は反省可能か——フッサール研究における先行研究の比較検討」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第45号、65–82頁。

——— [2019]: 「反省の問題は本当に問題なのか——フッサール初期時間論の再検討」、『哲學』第70号、知泉書館、220–234頁。

田口茂 [2010]: 『フッサールにおける〈原自我〉の問題——自己の自明な〈近さ〉への問い』、法政大学出版局。

ができる (cf. Zahavi [2014, 37–38])。